



瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1



主日の説教

今日のみことば

2020年8月30日 年間第22主日A年

瀬田教会主任司祭 小西広志神父

第一朗読：エレミヤ書20章7-9節

第二朗読：ローマの信徒への手紙 12章1-2節

福音朗読：マタイによる福音書16章21-27節

今日のテーマ：神の御心

三つの朗読から

第一朗読は嘆くエレミアのこころが表れます。しかし、いくら嘆いても、預言者の心の中に与えられた神のみことばは消えることはありません。「その言葉は私の心の中、骨の中に閉じ込められて、火のように燃え上がります」(エレ20章9節 フランシスコ会訳)。エレミヤは人々から笑いものとされ、あざけりを受けるのを嫌がりました。しかし、そんな人間的な思いをはるかに超えて、神のみことばはまるでマグマのように彼の中で燃え上がるのです。そして彼を突き動かします。「あなたの勝ちです」(7節同)、「わたしは疲れ果てました。わたしにはもうできません」(9節同)は、神にすべてを委ねようとするエレミヤの心情を表しています。

第二朗読も同じように神の御心に適う生活をすべきだとパウロは説きます。そのためには自分自身を神に喜ばれる生けるいけにえとして献げるといふ礼拝が必要ですし、同時に神の御旨をわきまえることが必要となります。

福音朗読では、せつかく父なる神のおかげで「あなたはメシア、生ける神の子です」(マタ16章16節 新共同訳)と告白したペトロが、イエスさまのこれからの行く道を理解できず、人間的な理解で済まそうとします。それに対して、イエスさまは「十字架を背負って、わたしに従いなさい」(24節同)と論じています。

イエスさまの十字架の道に従うとは、神のことに魅せられたエレミヤと同じようにイエスさまに魅せられて、自分を聖なる生けるいけにえとして奉獻しつつ、しかも自身を捨てて生きていくことなのです。

今日の聖句

21節：そのとき、イエスは、御自分が必ずエルサレムに行つて、長老、祭司長、律法学者たちから多くの苦しみを受けて殺され、三日目に復活することになっている、と弟子たちに打ち明け始められた。

「打ち明け始められた」の「打ち明ける」は、ギリシア語で「デイクニューミ」といいます。大きく分けて二つの意味があります。一つは「指し示す、見せる、知らせる」。もう一つは「明らかにする、証明する」です。ここでは後者の意味で使われているでしょう。

ところで、イエスさまによる受難予告は三回あります(16章21節、17章22-23節、20章18-19節)。イエスさまに危害を与え苦しめるのは、一回目の予告では「長老、祭司長、律法学者たち」ですが、二回目の予告では「人々：人の子は人々の手に引き渡されようとしている」となり、三回目の予告では「異邦人」(19節：異邦人に引き渡す)と変化していきます。イエスさまの死がユダヤ人の指導者たちから、一般の人々、そして異邦人をも巻き込んだものであることが明確になります。つまり、イエスさまの死の責任は、実は異邦人であるわたしたちと無関係ではないのです。

さて、イエスさまは、苦しめられ、十字架にかけられて死に、復活するという近い将来に起こるだろうご自分の秘密を、どのようなお気持ちでお弟子さんたちに打ち明けたのでしょうか。「きっと分かってくれるだろう」という思いだったと考えられます。大切なことをお弟子さんたちに伝えようとなさるイエスさまの気持ちを、少し味わえたらよいと思います。わたしたちも人生のある場面で、大切なことを大切な人に打ち明けます。分かってくれるだろうと期待を込めて語りかけます。イエスさまも同じだったでしょう。

しかし、お弟子さんたちはイエスさまの語っている内容が分かりませんでした。きっとイエスさまはガッカリしたと思います。それでも、都合三回にわたって大切なことを語りました。それは、語ることで、お弟子さんたちが十字架の死を見てつまづかないためだったのです。